

## 第四章の内容チラ見せ

また、親が子どもに勉強をさせる大きな理由の1つに、昭和や平成初期頃に流行った、

「良い大学を卒業して、良い会社に入って、マイホームを購入し、家庭を持つ」

というような幸せに関するステレオタイプに沿った人生を歩ませるということがあると思います。

しかし、この古いステレオタイプは、長い目で見たら必ずしも幸せでいられるとは限らないことは、私たちの祖父母世代や親世代が身を持って体感をし、示してくれています。

良い大学を卒業しても、就職できなかつたり、身を粉にして働いた結果、お金はたくさんあっても家族が離散したり、心身を壊してしまつたりします。

マイホームを買ったはいいものの、毎月のローンの支払いのために心身を壊しても仕事を辞めることができなかつたり、子どもが産まれて家族ができて、親子の関係がこじれてしまつたり、夫婦関係が子どもありきになってしまつて、「旦那元気で留守がいい」というような冷え切つた夫婦関係に成り下がつてしまつたりします。

子どものことに集中するがあまり、夫婦関係が疎かになると子どもが成人して実家を離れると、夫婦2人だけの生活に耐えられなくなり、熟年離婚をするケースも増えました。

離婚をしないまでも、何十年もお互いのことを言葉で批判したり、言葉にしなくても心の中では蔑むような、そんな夫婦関係がとても多いです。

この幸せのステレオタイプは、「家庭を持つ」というところまでしか考えられていないから、それ以降は定義されず、マイホームを買って、家庭を持ってしまうと、それ以降は成り行きに任せることになります。

「家庭を持つ」がゴールだから、それ以降はもう幸せでいようという努力をやめてしまいます。

夫婦関係を良くしようとか、親子関係を良くしようとか、自分の人生をより良くしようという気持ちをゴール地点（=家庭を持つ）に置き忘れてしまいます。

自分や、夫婦関係、親子関係をより良くしようとするのをやめて、

「子どもをより良くしよう」

とし始めます。

子どもをより良くしようとするのは、一見すると良さそうですね。

しかし、自分をより良くしようとしてない親が、子どもをより良くしようとしても、子どもはあまり変化はしません。

なぜなら、親子関係というのは、親と子どもとの関係で成り立っているもので、仮に子どもが変化しても、親が変化していなかったら、親に引っ張られて、子どもは元に戻ってしまうのです。

なので、子どもにより良くなってほしいと思うのであれば、親も自分をより良くしようとしている必要があります。

「家庭を持つ」をゴールにするのがダメなわけではなくて、子どもができそうなのに、子どもができた後に、

「自分がどんな人生を歩みたいのか」

「どんな夫婦関係にしたいのか」

「どんな家庭にしていきたいのか」

「子どもにどんな人生を歩んでほしいのか」

そして、

「自分がどんな親でいたいのか」

を考えていないから、子どもができた後に、夫婦や、家族の関係が悪くなったり、自分の心身を壊してまで仕事をしてしまったりするのです。

長嶋監督の息子である長嶋一茂さんがあるテレビ番組で、こんな話をしていました。

「僕が巨人軍に入ってから戦力外通告を受けたのは、プロ野球選手になることをゴールにしていたから。

プロ野球選手になった後、どんな選手になりたかったのかを全く考えていなかったからです。」

幸せな人生を生きるには、ゴールを達成しそうになったら、ゴールの向こう側を考えて新たなゴールを設定する必要があります。

もし、ゴールの向こう側を設定していないなら、それは人生を成り行きに任せるということであり、

「自分の人生の主導権を他人に明け渡すこと」

に他なりません。

成り行きとは、他人が作った流れに身を委ねることを言いますから。

自分の人生の主導権を他人に明け渡してしまっているから、がんばって勉強をして、良い大学に入り、良い会社に入り、家庭を持ち、マイホームも買った後、親子関係や、夫婦関係が悪くなっても自分が変わろうとせずに、相手が変わってくれるのを期待してしまう。

しかし、相手が自分の思い通りに変化をすることはないので、関係は悪いままです。

親が、子どもに昭和のステレオタイプを実現させようと思って勉強をさせようとしても、その結末に待ち受けているのは、

「他人に自分の人生の主導権を明け渡す生き方をする子ども」

です。

先ほど、

「子どもを幸せにしてくれるような学習は、子どもが主体性に基づいてする『自律学習』以外にはあり得ない」

と書きましたが、他人に自分の人生の主導権を明け渡している状態での学習は、自律学習とは言いません。

なので、この状態では親や先生などの期待に応えるような勉強はしますが、いくら勉強をがんばっても自分を幸せにするための勉強にはなりません。

自分を幸せにするための勉強でないから、子どもは自分からは勉強をしないということです。

そして、私たち親が

「良い大学を出ても、良い会社を出ても、家庭を持っても、マイホームを持っても、幸せになるとは限らない」

ということをも身を持って示してもいるから、子どもはもはや親と同じ価値観を振りかざして勉強をさせようとしても、子どもには響きません。

良い会社に入ったのかもしれませんが、会社の愚痴を言っていたり、仕事から疲れて帰ってきてお酒を飲んで寝るだけになってしまう。

家庭を持っていても、家族に冷たかったり、厳しく怒っていたりする様子を目の当たりにもしているかもしれません。

マイホームがあるけれど、そのローンの支払いに苦勞して「お金が無い」が口癖になっているかもしれません。

そんな様子を子どもは見せつけられているので、子どもは同じようになろうとは思いませんよね。

なので、今現在、幸せではない親が「将来のために勉強をきなさい」と言っても、全然説得力がありませんし、そもそも、嫌なことには誰も進んでやろうなんて思いませんよね。

私たち昭和の人間は、

「良い大学に入って、良い会社に入って、家庭を持ち、マイホームを買う」

という明確な夢があったことと、当時は景気も良かったそうなので、働けば働いただけお金が増えたこともあり、それが勉強や仕事をするモチベーションになっていました。

しかし、平成や令和に生まれた子どもたちは、一生懸命勉強をしたり、仕事をして、必ずしも成果が出るとは限らない時代に生きています。

そんな時代に生きる子どもたちに、昭和の価値観を振りかざして、「勉強きなさい！」なんて言っても響くわけがありませんよね。

しかも、今現在問題なく生活ができている状態で、

「将来、仕事をして食べていくために勉強をきなさい」

と言ったところで、食べていけなくなる様子もイメージできないでしょうし、実際に、食べていけなくなることはほぼありません。

仮にお金が全く無くなって、もう何日も何も食べずにいて道端に倒れたとします。

そうすると、通りすがりの人が救急車を呼ぶと生きながらえることができます。

学歴が全くなくてもアルバイトをしたら、自分一人が生きていくだけのお金を得ることもできます。

これは極論ですが、全く仕事をせずに生活保護を申請すれば生きていくことはできます。

もちろん、子どもがアルバイト生活や、生活保護を求めるという話ではなくて、色々と失敗をしたり、上手くいかなくてお金が全くなくても社会的に最低限の生活は保証されるという話です。

なので、私たちは現代において、よほど覚悟を決めて「餓死をするぞ！！」と思わない限り、

「食っていけなくなる」

ということはありません。

親が子どもに「勉強しなさい」という理由は、「将来、食っていけなくなるから（＝餓死するから）」という恐怖心からだと思いますが、食っていけなくなることはありませんし、子ども自身も食っていけなくなることに全然イメージが湧かないと思います。

今現在、まさに物質的に豊かな生活をしているわけですから。

「いやいや、親の方が早く死ぬのだから、親が活着ているうちに生きる力を身に付けてほしい」

と思うかもしれません。

私たち親世代が思う「生きる力」とは、「働いてお金を得て、生活をする力」という意味だと思いますが、これは先ほど書いたことと同じことですが、生活をするだけならとりあえずアルバイトをすれば生きていくことができます。

なので、親が死んだ時点で何の学も無く、キャリアも無かったとしても、何かしら生きていくことはできます。

社会の方が、人が勝手に死んでいくことを許しはしません。

私たち昭和の人間が子どもに関わる時には、

「少なくとも現在からしばらくは、食っていけなくなることはない」

ということを受け容れなければなりません。

このことを受け容れない限り、現代を生きる子どもが勉強をするように関わることはできません。

では、現代を生きる子どもが勉強をする時は、どういう時でしょうか。

(続く)